

病 防 第 376 号
令和8年9月 16 日

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長
(公 印 省 略)

病害虫発生予察特殊報について

令和8年度病害虫発生予察特殊報第2号を発表したので送付します。

令和8年度病害虫発生予察特殊報第2号

1 病 害 名 : トウガラシ黄化病(仮称)、トマト黄化病

2 病原ウイルス : トマト退緑ウイルス (tomato chlorosis virus: ToCV)

3 発生地域 : 沖縄本島

4 発生作物 : ピーマン、トマト

5 発生確認の経緯

- (1)ピーマン: 令和8年4月、沖縄県八重瀬町のピーマンにおいて葉脈間黄化や葉巻症状等を呈する株がみられ、横浜植物防疫所による同定の結果、トマト退緑ウイルス(ToCV)の感染が確認された。ピーマンでのToCV感染確認は国内初である。令和8年9月までに八重瀬町、南城市および糸満市でToCV感染株を複数確認している。
- (2)トマト: 同年9月までに豊見城市でToCV感染株を複数確認している。トマトでは20都府県以上でToCVの発生が確認されているが、沖縄県では初の確認である。
- (3)検出された本ウイルスの塩基配列は、これまで国内で報告されたToCVのウイルス株と異なり、台湾で検出されたウイルス株に近縁であった。

6 病 徴

ピーマンでは、下位葉から葉脈間黄化、葉巻症状がみられる(図1)。また、一部の果実は健全果と比較し色が薄くなったり、小型化したりする場合もある(図2)。海外では、パプリカ等で葉の葉脈間黄化、葉巻症状、株の生育不良および果実収量の減少が報告されている。

トマトでは、下位葉から葉脈間黄化がみられ(図3)、症状が進行すると紫褐色のえそ症状(図4)や、葉巻症状が現れる。他県では果実の小型化も報告されている。ピーマン、トマトとも要素障害(マグネシウム欠乏)の症状に類似する。

7 病原ウイルスの特徴と伝染方法

本ウイルスはクリニウイルス属のウイルスで、タバココナジラミ(図5)およびオンシツコナジラミによって媒介されることが知られている。半永続伝搬であり、ウイルス媒介能力は数時間から数日間保持される。経卵伝染、汁液伝染、種子伝染および土壌伝染はしないとされている。

8 宿主植物

海外において、ToCVは28科119種の植物に自然感染することが報告されている。経済作物の中ではトマトを主な宿主とするが、ピーマン、ナス、カボチャ、オクラ、ササゲ、レタス等にも感染する。また、テリミノイヌホオズキ等多くの雑草でも感染事例が報告されている。

9 防除対策

本ウイルスはコナジラミ類により媒介されるため、媒介虫の防除を徹底する。

- (1) 媒介虫侵入防止方法として、施設開口部に防虫ネット(0.4mm 目合い以下)の展張や、光反射シートの設置が有効である。
- (2) 苗による病気・媒介虫の持ち込みを防ぐため、定植前に苗をよく確認し、健全苗を用いる。
- (3) 育苗期または定植時には粒剤を施用し、初期の感染防止を徹底する。
- (4) 施設内に黄色粘着板を設置し、媒介虫の早期発見・防除につなげる。
- (5) 発病株は伝染源となるので速やかに抜き取り、密封して、ほ場外に持ち出し処分する。
- (6) 多くの雑草が媒介虫の発生源となるため、施設内外の除草を徹底する。また、施設内やその周辺では、栽培に不要な植物(特にナス科)の栽培を控える。
- (7) 栽培終了後は媒介虫の施設外への飛び出しを防止するため、ハウスを密閉して蒸し込み、死滅させる。
- (8) 媒介虫に対して薬剤防除を行う場合、薬剤抵抗性の発達を防ぐために同系統薬剤の連用を避ける。天敵を活用している施設では、天敵に影響の少ない薬剤を選定する。



図1 ピーマン葉の
葉脈間黄化、葉巻症状



図2 果実の症状
(左：健全果、右：小型化した果実)



図3 トマト葉の
葉脈間黄化症状



図4 トマト葉のえそ症状



図5 タバココナジラミ成虫

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★

TEL : (本所) 098-886-3880、(宮古駐在) 0980-73-2634、(八重山駐在) 0980-82-4933

ホームページアドレス: <https://www.pref.okinawa.jp/shigoto/nogyo/1010700/index.html>

